

「臨牀透析」と共に歩む

齊藤かしこ*

「臨牀透析」が2025年1月に40周年を迎えた。私の腎臓領域での管理栄養士生活は39年目が過ぎ、共に歩んできた一人である。腎臓領域の管理栄養士の歴史は透析患者の栄養管理から始まったといっても過言ではない。当時は栄養管理など、他領域ではあまり言われていなかったように記憶している。厚生労働省がチーム医療という言葉を使いだしたのが20年ほど前であるが、透析医療の分野では50年前から当たり前のように医師、看護師、管理栄養士、透析技師(現 臨床工学技士)がチームとなっていた。現に本誌創刊号でも、チーム医療、栄養管理という言葉が見られる。「臨牀透析」が当時では考えられなかった多職種に向けた雑誌になったのは、必然の結果だったのではないだろうか。前任地の横須賀共済病院の透析室には、50年以上前から調理実習のできる栄養相談室があり、専任の管理栄養士が常駐し、透析食はもちろん高カロリーの間食の研究が行われ、調理した食材のカリウム実測値などを調べていた。「臨牀透析」の初期にはデータを提供し、原稿の執筆もしていた。

情報媒体の少なかった時代、臨床、薬剤、栄養、心理すべての情報が得られるこの雑誌に助けられた管理栄養士はもちろん、透析スタッフは多かったと思う。かくいう私も助けられた一人である。

創刊された1985年当時、高リン血症の治療薬としてアルミニウム製剤が使用され、機器の進歩も相俟って透析時

* 横浜共済病院栄養科

間は6時間から5時間, 4時間へと変わり, 「透析患者には食事療法はもういない, ガンガン食べて飲んでも, 薬と透析でどうにかできる. もうすぐ管理栄養士はいらなくなる」と陰口を言われた時代でもあった. しかし, アルミニウム製剤は脳症を引き起こすことから禁忌になり再びリン制限の食事指導の強化が求められ, その後透析患者のCKD-MBD, 低栄養, 高齢化, フレイル・サルコペニアなど食事や栄養に関する問題は多岐にわたり, 管理栄養士は変わらず透析領域で活躍している. その傍らには常に「臨牀透析」があった.

情報源が紙媒体からインターネットになり, 得たい情報が瞬時に得られる時代になったが, それが正しいものかどうか判断するために情報リテラシーが求められるなか, 正確な情報を提供している専門雑誌も生き残りが厳しい時代になっている. さらにAI(人工知能)の発達で世の中はどのように変化していくのだろうか. 「臨牀透析」には, 形は変化しても次の時代に続いてほしいと願っている.